〈名画の扉〉

大川美術館常設展示から

「顔」（部分）
1938年ごろ、インク・紙
27・2センチ×36・5センチ
（寄託作品）

松本竣介（1912～48年）

前回もご紹介した松本竣介の素描です。今回は顔の部分ではなく手の部分に着目していきます。こちらの手や足も、「無産階級の画家ゲオルゲ・グロッス」（柳瀬正夢編著、鉄塔書院、1929年）に収録されている作品図版からの模写になります。それぞれ異なった作品図版から模写されており、グロスの作品一つ一つに対して、顔、手、足とパーツごとに表現を追っていた竣介の視点がうかがえます。

中学校入学式の日、流行性脳脊髄膜炎に倒れ聴覚を失った竣介は、周囲と会話をする際、空中に指で文字を書いてもらい、それを読み取ってコミュニケーションをとることもあったようです。竣介にとって「手」は相手の心情や周りの状況を把握するためにも注目すべきものであったといえるでしょう。

そうした視点が創作にも反映されているのか、松本竣介の作品には人物とともによく「手」が印象的に描かれており、作品の重要な要素となっています。

（池田）